



フランソワ・ミレーとクロード・モネが好きだ

美術部 山下 寛二

いくつかのヨーロッパの美術館を見て、何となく絵とは良いものだなど焦がれがあった。

美術館のミレーのコーナーには、静かに鑑賞している人がいつも見られる。家族や身の回りの人々に対する慈愛や望郷の念など、人が誰しも抱く普遍的な思いが感じられる。特に生活感あふれる農夫の描き方には、日本の人物表現に通じ、丸みを帯びた人物の造形は、私にあたたかみをもたらす。

モネは風景画の空や水面の光線変化の捉え方や色彩感の明るさ、色を混ぜ合わせて平たく滑らかに塗るのでなく、筆触を生かして原色に近い明るい色彩を並べることで、画面には、いかにも光を燦々と受けているような雰囲気生まれることに、私はとりわけ親近感を感じる。

退職してサンデー毎日となり、具体的な生きる目標が必要と感じ色々な趣味の会を覗いてみたが、たまたま学生時代の友人が絵画教室に行っていて、2003 年是非入れと強く誘われたことで、美術館で感銘を受けたミレーとモネの作品が蘇った。しかし、絵を描くことを一つの生活の目標にするには、それだけの動機づけが必要となります。それは描き続けていると登山家にマウンテンハイが生じるように、絵描きにも夢中になって行くなかでペインティングハイが、瞬間的にも生じるように感じる。また油絵は、水彩と違って後で修正がし易いと聞いたことが、大いに励みになっている。その楽しみが生き甲斐の一つになるのではないかと。

いまだ衰えないコロナ感染症の中で、今年に入ってからこの 2 作品を創作致しました。

きじ夫婦

F10 制作 2021 年 4 月



2021 年の春を迎えるにあたり、春の新緑に遊ぶきじの夫婦が絵画教室のモチーフ展示コーナーに飾られた。その新緑の野原は春の朝焼けの中に希望があった。新型コロナウイルス禍で鬱積した暗い雰囲気を綺麗なきじの夫婦愛で吹き飛ばして貰いたかった。

幸せな新婚夫婦—鍋の誓い

F8 制作 2021 年 3 月



昨年、私共夫婦は所属する教会のある会員の結婚に Witness (見届け人?) を仰せつかった。年老いた我々夫婦には嬉しい役回りであり、その後も二人は大変幸せそうに暮らしている。二人が抱えているフランス製の鍋は友達から贈られたお祝い品、豊かな愛に包まれた家庭を築くのだと誓い合ったところを実行してほしいと祈って絵に留めた。

愛は寛容で、愛は親切で、人をねたまず、自慢せず、高慢になりません。礼儀に反せず、自分の利益をもとめず、苛立たず、人がした悪を心に留めず、不正を喜ばず、真理を喜ぶ。すべてを耐え、すべてを望み、すべてを忍ぶ。愛は決して絶えることなし。